

東日本大震災は多くの尊い命を一瞬で奪った。亡くなった人たちのご冥福を心からお祈りする。そして私たちは今、生き残った人たちへの支援に全力を挙げなくてはならないと改めて思う。

テレビで、「いま必要なものはなんでしょうか」という問いに、多くの被災者が「食べ物と飲み物」と答えていた。被災地での食料不足は深刻で、首都圏でもスーパーなどで品薄になっている。あるところにはあるはずなのに、必要なところに届いていない。要は流通の問題である。

被災地の現状の一方で、日本では毎日、おびただしい量の食料が封も切らずに廃棄されているのだ。なぜか。賞味期限が迫るなど売り物にならなくなった食品を流通させるシステムが整備されていないからだ。

私が住む兵庫県芦屋市に「フード

バンク関西」というボランティア団体があつた。訪ねてみると、ごく普通の民家で、軒下にジャガイモや紅茶の缶などの段ボールが積み上げられている。狭い事務所には山のように食品が積み上げられ、2人の女性がせわしく点検している。「これらは



奥田 和子

全部、業者から譲り受けた食品なんですよ」と代表の女性。

たとえば米。精白後、1カ月をめぐりに店頭に並べるが、その期間が過ぎると売れなくなる。このような捨てられる運命にある食品を引き取り、

捨てないシステム

必要とする人々に無償で分配するシステムを彼女たちは作り上げた。食品を提供する企業は20社以上あり、年間150トンの食品を扱う。ボランティアは40人。もちろん無給だし、事務所の利益もない。運搬などの経費は寄付でまかなっているという。

この種の活動を美談と称賛するだけでは何も解決しない。食品の廃棄量はあまりにも多すぎて、少数のボランティアだけでさばききれものではない。

そこで国や行政の出番である。彼女たちのノウハウを学んで、積極的に「食料を捨てない仕組みづくり」に取り組むべきである。そういう仕組みを作っておけば、有事の際にもきつと役立つはずである。

(甲南女子大名誉教授)

—おわり